

「男性の目から見たセクシュアル・ハラスメント」

大阪大学 伊藤 公雄

1. セクシュアル・ハラスメントにたいする男女の認識のズレ

私に与えられたテーマは、「男性の目から見たセクシュアル・ハラスメント」です。

先ほど牟田さんが、「大学というような場所でまさかそんなことがあるはずはない」という人が多いとおっしゃいました。ぼくも多くの方々がそう思っておられるかもしれないな、と思っております。

私はあちこちで女性問題についての職員研修のチューターをやっていますが、ある研修で公務員の方たちを集めてやったときに大変おもしろい結果がでました。職場の問題、地域の問題、セクシュアル・ハラスメント問題など、班に分け、ディスカッションしてもらって、最後に報告を行うことになっていました。セクシュアル・ハラスメント問題に集まったのは男性の公務員ばかりで、そのこと自体が大変おもしろいのですが、その方たちが、最後に、「公務員はセクシュアル・ハラスメントはしません」と報告されました。彼らの頭のなかでは、セクシュアル・ハラスメントというのは、公務員の世界にはないものだと思っていたのですね。ところが、職場の問題の担当をしている女性たちの報告がありまして、当然なかにはセクシュアル・ハラスメントの問題がでてくるのですね。自分たちは職場でセクシュアル・ハラスメントを受けている、とはっきりおっしゃるわけです。ところが男性の目には、公務員はセクシュアル・ハラスメントはしない、することはありえないんだと頭で考えている。こういう男女のズレは、セクシュアル・ハラスメントを考えると大変重大だと考えております。

2. セクシュアル・ハラスメントは男性の問題ではないか

金子正臣さんという東京都の労政課でセクシュアル・ハラスメント問題を独自で担当しておられる方と、この間ちょっと話す機会があったのですけれども、大変おもしろいことをおっしゃっていました。それは、大企業にセクシュアル・ハラスメントについてアンケートをすると、ほとんどの企業が「わが社にはセクシュアル・ハラスメントはありません」と応えてくるんだそうです。まあ回答者は、おそらく男性なのでしょうが。

金子さんによると、その理由というのが、第1番目は、セクシュアル・ハラスメントを訴えるような女性はわが社にはいない。2番目には、わが社には女性がいない。3番目にはわが社には若い

女性がいらない、という順番だったそうです。しかし、金子さんの説では、セクシュアル・ハラスメントを訴える女性がいらないというのは、牟田さんの話ではないんですけれども、女性たちが被害について表だっていえない環境をつくられているんだ。絶対あるに決まっている。こんなの嘘に決まっている、というわけです。「女性がいらない」という会社の場合も、たいてい外へでてセクシュアル・ハラスメントをやっている。

「若い女性がいらない」という企業については、セクシュアル・ハラスメントは年齢に関係ない。全然年齢に関係ない形で行われているんだ、と。これはまったくその通りだと思います。しかも金子さんがつけ加えられたのは、この大企業で回答した人たちは、訴える女性はいない、そもそも女性がいらない、若い女性がいらない、と、つまり全部女性の問題として考えている。ところがどうみたら、男性が女性に対して行うセクシュアル・ハラスメントは、女性の側の問題ではなくて男性の側の問題なんだということです。このことはやはりきちんと押さえておきたい。

それにつけ加えておもしろいことを金子さんおっしゃってました。それは、我々は、セクシュアル・ハラスメントをする男性は、なんんかこう陰鬱で、根暗な男性をイメージするわけですが、窓口で相談を受けていますと決してそんなことはない。むしろ、バリバリの実力派、仕事もよくできる、見栄えもいい、そういう男性がセクシュアル・ハラスメントの加害者であるケースが大変多いということです。これも我々がしばしば陥りやすい思いこみですね。むしろ「俺は男だ」といって、バリバリ活躍しているようなタイプの方がセクシュアル・ハラスメントに走りやすいんだとおっしゃっていました。これはぼくには大変説得力のある話だったわけです。

3. なぜ男性はセクシュアル・ハラスメントに走るか

セクシュアル・ハラスメントは男性の問題であるということをまず押さえておいた上で、ちょっと理屈ばい話になりますけれど、それではなぜ男性がセクシュアル・ハラスメントに走りやすいのか、について考えたみたいと思います。

(1) 性役割のあふれ出し論／男性の本質＝暴力的論

これについては、いろいろな理論がすでにだされています。私は社会学が専門なのですが、古典的な社会学でしたら、いわゆる性役割論で説明しようと思います。男性は能動的で、行動的で、積極的な性役割を与えられているので、そういうものの延長のなかでセクシュアル・ハラスメントがおこる。性役割のあふれだし理論というものです。これには、ぼくは賛成できないところがあります。余りにも単純すぎるのではないかと思うからです。

もう一つ。最近のアメリカを中心としたフェミニズムの議論でいま大きなテーマになっているのは、レイプの問題、セクシュアル・ハラスメントの問題、あるいは家庭内での妻に対する夫の暴力です。これは70年代以降大きなテーマになってきました。たとえば、ブラウンミュラーは、男性の生理的能力にもとづく、ある種の攻撃性が原因だという議論を提起している。

全てのフェミニストがそうだと、ぼくは知っているわけではないんですけれども、レイプやセクシュアル・ハラスメントを男性問題と絡めて議論するときに、しばしば多くのフェミニストたちは、攻撃性は男性の本質なんだという議論をたてています。たとえば、マッキノンなどです。彼女の本は日本でも幾つか翻訳がでています。そのなかでもはっきりと書いています。「全てのヘテロセクシャルの女性は犠牲者であり、全てのヘテロセクシャルの男は暴力的である」という具合です。実際にそういうケースはたくさんあるわけで、気持ちはよくわかるのですが、いささか極論なのではないかとぼくは考えています。

といいますか、私だけではなくて、性差別に反対しながら男性研究をしようという立場からの視点でいいますと、むしろ男性の男性性に対するこだわりというようなものが、そういうセクシュアル・ハラスメントやレイプという男性にしばしば起こりがちの社会的な逸脱行動の背景にあるのではないか、と思うからです。

もちろんマッキノンはフェミニストとして大変優れた方で、彼女の議論の全体を否定しているわけではありません。ただし、男性の本質としての攻撃性、あるいは暴力性が、レイプやセクシュアル・ハラスメントのベースになっているという議論は、マッキノンだけではなくて多くのフェミニストが共通して指摘していることなのですから、やはり男性というものをあまりに過剰に一般化しているのではないか、男性の本質はこうだときめつけてしまっているのではないかと思います。歴史的、社会的、文化的な文脈によるさまざまな男性性があるにもかかわらず、男性というものを超歴史的にみてしまっているのではないか。逆にいいますと、男性たちが女性に対して、女性は母性愛という本能をもっているという形で、女性をある種の性的分業で固定化させてしまっているのと同じ構図ではないかと思います。女性の側から、男性というものは暴力的なものである、それが本質なんだと、固定化してしまうような可能性をもった議論なのではないか。彼女たちの議論の全体を否定しているわけではないのですが、男性性の過剰な一般化に関しては、ぼくは批判的です。

(2) 男性覇権を求める指向性—男性性へのこだわり—

男性研究におけるセクシュアル・ハラスメント論、あるいはレイプ論を考えていくときに、ロバート・コンネルの『ジェンダーと権力』という大変よくまとまった教科書的な本があります。コン

ネルはちょっと前に日本に遊びに来られたことがあるのですが、大変ハンサムで素敵な男性でした。まあ、どうでもいいことなので、それはおいておきましょう。

コンネルの説というのは先ほどいいましたように、男性を過剰に一般化するという危険性を押さえた上で、男性性の多様性を考えようというものです。例えば、階級によって—日本の場合は、階級というのは見えにくいところがあるかもしれないけれど—あるいは、社会的、文化的規定性のなかで、様々な男性性というものがある。単に男の本質＝暴力性と規定しない方がいい。ただ、男性の中に共通するひとつの流れがある。マスキュリン・ヘゲモニーといった、男性覇権を求める傾向性です。

覇権性にもいろいろある。ゲームにおける覇権性や、どちらがかっぱらいがうまいかを争う覇権性の場合もあるかもしれない。そういう様々のレベルで覇権を争う、そういう傾向については、男性の意識の中で、ある種の一定の共通した指向性があるのではないか。自分に対して、自分が男であることを証明するために覇権を示さなくてはならない。そのために他人に対して、自分が認められる形で、男性性を表現しなくてはならない。男たちは、自己の男性的ヘゲモニーを証明する必要性にいつでも捕らわれているんだ、というわけですね。

全部の男性がそうであるとは思いませんけれども、大きな流れとしては押さえられるんじゃないか。コンネルさんの影響を受けた、例えば、メッサー・シュミットの著書、昔の戦闘機に詳しい人はピンと来るかもしれませんが、このメッサー・シュミットの、『男性性と犯罪』、これはなかなか面白い本です。これは今いったように、犯罪的な行為、社会的逸脱行動というのは、男性にとって男性性を証明するためのひとつの資源なんだとみるわけです。

なぜ、男性に犯罪が多いか。これは犯罪社会学、あるいは社会逸脱論のなかでは、重要なテーマなんですけれども、わりと見落とされてきた問題です。男性が自分は男である、自分は覇権をもっているということを示そうということに原因があるのではないか、というのがメッサー・シュミットの考え方です。他者と自己とに自分が男であることを示すために、犯罪的な行為、あるいは社会的逸脱行為を行う。これは、男性の世界ではありがちで、ちょっとはみ出した奴の方がカッコいいわけですね。あるいは、はみ出すことで、自分のある種の優越性を、他者にあるいは自己に示すようなスタイルがひそんでいる。これは全ての男性がそうだとはいっているのではないですけども、そういう大きな流れがあるんじゃないかということです。

その大きな流れのなかで、男性ヘゲモニー、あるいは男性たちの男らしさへのこだわり、といったものをベースにしながら社会や文化をもう一度見直すという作業は、大変刺激的な仕事であると思います。ぼく自身も、ここ十数年間、こういう視点から男性研究を、仕事のひとつとしてやってきたわけです。

例えば、ハイト・レポートを書いた、シェア・ハイトのハイトリポート男性版というのがありま

す。厚い本が3巻日本語で翻訳されています。これを読むと、男性が自分のペニスの大きさや、持続時間の長さや、性関係をもった女性の数、といった性的能力における自己の大きさ、大量さ、というものに対して大変大きなこだわりをもっている。逆に自分の小ささ、少なさに対する負い目意識も強い、というのが大変よくわかる。

また、男性たちが感情表現ができない、ということも示されています。例えば、「男は怪我をしても我慢し、泣いたり、愛情をおおびらに表現したり、他人の感情に反応を見せたりするべきではない。男は激しい感情や、やさしい気持ちを表すと、身の置き所のない気持ちになる」という具体的な声があります。あるいは、「どうかすると感情を露わにしないことがある。一人で処理できるんだといい聞かせてしまう」、「ロボットのような気持ちになったりするのはいしょっちゅうだ」。あるいは、「自分の感情に正直になろうとするんだが、自分で自分の感情を認めるのがいちばん難しい」、「いつでも、うまくいっている振りをする習性ができてしまっている。きっと泣くなという訓練と、男であれという訓練のせいだと思う」と、まあこんなことが書かれているわけです。

なかには、「いつも俺は男になりたいと思っていた」とか、「男は常に自信に満ちていて度胸がある、自制心がなければならない」とか、「男らしさとは押し出しと自信と強さと声によって決まる」と思うとか、男性たちの男性性に対するこだわりということが赤裸々に書かれているわけです。そういうものを読んでいると、男は強くなきゃいけない、男は感情を表にだしてはいけない、あるいは男は女性をリードしなきゃいけない、まあそういう男性の男らしさに対するこだわりというようなものが大変よく読みとれます。

4. 男性ヘゲモニーの3つの指向性—優越、所有、権力—

そういうこだわりを、男性ヘゲモニーというふうにいえるのかもしれませんが、それを私自身はもうちょっと細かく分けしようと提案をしています。それは、この男性ヘゲモニーというものを、3つの指向性、優越指向、所有指向、権力指向、から分析しようという提案です。

優越指向とは他人より優越していきたい、勝負に勝ちたい。所有指向とは、できるだけたくさんものを所有したい、しかもそれを自分のものとしてコントロールしたい。権力指向とは、自分の意志を相手に押しつけたい。こういう指向性であると、まず押さえていただきたい。

女性でももちろんあるわけですが、男性のなかに当然強い。所有指向というのは、ある人からちょっと批判されたのですけれども、むしろ女性の方が強いんじゃないかという声もあります。例えば男女関係のなかで、男性を所有してはなさないというのは、むしろ女性に見られる現象ではないかと、いうことです。ただ、女性と男性の違い、男性のこの所有指向というのは、モノとして管理するということなんですね。つまり、女性の所有指向というのは、しばしば人格的所有であるのに

対して、男性は先ほどいいましたように、人格ではなくて限りなく客観化したモノとして管理したい、そういう所有指向、というふうに位置づけたいと思っているわけです。

男性たちは、こういう指向性を結構いろいろなところでインプットしている。優越と所有と権力をめぐるって、男性同士でこういう争いはしばしば行われるわけですよね。しかし、この3つの指向性が、相手が男性であるとき以上に、男性にとって熾烈な形で表れるのが男女関係のなかです。男性同士なら、優越指向のゲームというのは勝ち負けがある。所有指向のゲームにも勝ち負けがある。権力指向のなかにも勝ち負けがある。それは男性同士なら認めることができる。しかし、男女関係ということになると、男性たちにとって、これはしばしば絶対負けられないゲームになる。

男は女に対して優越していなければいけないのです。女性をモノとしてきちんと管理できなければダメなんです。男は女に対して自分の意志を押しつけられなかったら男ではない。こういう、男性たちの女性に対する男性ヘゲモニー、これはもう、かなり固定的なものなのではないかと思います。しかも、これを男性たちは無自覚のまま、自分の中に構造化してしまっている。

よく例としていうのですけれども、最近夫婦共働きで妻の方が出世してしまうケースがある。こういうときは男性たちはどうするか。これはやはり負けが認められないんですね。自分が出世競争で負けたことを認めたくないばかりに、様々な形で妻にいろいろな妨害をする。様々な攻撃的な、暴力的な行為をする。負けが認められれば関係はうまくいくのですが、負けが認められない。多くの場合離婚というケースになる。

あるいは、もっと悲劇的なケースであまりいいたくはないんですが、こんな話をしましたとき、あるカウンセラーの方に、夫婦間暴力のカウンセラーをしている方ですが、その方から聞いたのですけれども、夫婦間暴力つまり夫から妻に対する暴力をカウンセリングしていると、そのほとんどが妻が夫より学歴が高いというケースだそうです。「結婚するのに学歴なんて関係ねえよ、愛さえあれば」、と書いていてもやはりだめなんですね。あらゆる面で、男は知的にも精神的にも肉体的にも女より上じゃなければいけないわけです。学歴の場合は、あらかじめ負けてるわけです。もちろんいろいろな要因があるとは思いますが、やっぱり学歴で負けている負い目みたいなものが、口ではいえないわけですから、それが暴力的なヘゲモニーへと転換して、手がでちゃうというように、になってしまうのではないかと、分析しました。もちろん、「学歴に差がある場合は結婚するな」というているわけではありません。そんなくだらない思いこみから自由にならないうことがいいたいのです。

所有指向でも、これはよく女性の話のなかででてくることですけれども、40過ぎて子育ても終わって、さてパートにでもと思うと、夫が止める。「俺の稼ぎでは食えないのか」と。でもやはり女性たちは自分の社会性を試したい。社会に出て自分というものを試したいから、仕事したいんだという。しかし、どうしても夫は認めてくれない。ここにも所有指向が作用していると思います。

そんな話をしましたら、ある革新系の出版社の方ですけれども、うちの社員で妻に門限を設けていて、9時に帰って来なければ殴る男性がいるという話を聞きました。男性たちは、女性を、人格的に管理したいのではなくて、モノとして管理したいのですね。こういう指向性というのは結構強いと思います。

権力指向は、いわずもがな、というやつです。

セクシュアル・ハラスメントというものは、考えてみると、そういう男女の力関係、優越、所有、権力の3つの指向性が合体する形であらわれる、典型的なケースなのではないかと思うわけです。

つまり、自分は女性より上だと思っている。同時にモノとして管理しなくてははいけないとも思っている。人格としては見ていないわけですね。かなり極論ですけれども、さっきいいましたように、女に自分の意志を押しつけられないようでは、男ではないと、というような権力指向の意識もある。その意味で、セクシュアル・ハラスメントは、現在の男性文化の中で起こりうる可能性を常にもった問題なのではないかと思います。

5. 日本社会とセクシュアル・ハラスメント

もちろん、これはあらゆる面で力関係がベースになっているのはいうまでもないことです。セクシュアル・ハラスメントの問題を大学問題と重ねてしゃべれというご指示なのですが、なかなか大学にいきません。大学に行く前に、もう少し日本社会というものを前提として考えておいた方がいいのではないかと思います。

先ほど牟田さんがいったことですが、我慢する女は自明のものになっている。逆にいうと、女に意志を押しつけられる男っていうものが男らしい男になっている。そういう文化というものがある。男性ヘゲモニーというものが大変自明化している社会だということですね。実際、女性たちは声を上げてはこなかったということもあるだろうし、大変強い性別役割意識というものがある。

国際比較で意識調査をしてみますと、少しずつ減ってはきていますがそれでも、若い世代も年を取った世代も、男は外で働き、女は家を守ることに賛成だという、大変強い傾向が日本においては続いています。少し前の総務庁の青年の意識調査のなかでも、日本は11カ国中上から3位でした。1位がロシア、2位がフィリピン、3位が日本、4位がタイ、続いて韓国、アメリカ、フランス、ドイツ、最後がスウェーデンとそんな順番で続きます。しかも、3位と4位の差はかなりある。

フィリピンの場合、マッチョな文化がある国です。ロシアの場合も社会主義体制の下でも、女性問題はむしろ手をつけられなかったという見方ができます。日本も、例えば家庭教育で、男の子は男の子らしく育てたい、女の子は女の子らしく育てたいという人は、男女共7割ぐらい出てくる国なわけですね。あるいは、学校教育を見ても、「隠れたカリキュラム」といわれている仕組

みがある。自覚しないまま性別役割を教えこんでしまうわけです。出席簿は男の子がさき、卒業式で卒業証書をもらうのは男の子がさき、運動会で走るときも男の子がさきと、目に見えない形で男性が優先する学校教育、社会教育、家庭教育というものが存在している社会だと思います。

セクシュアル・ハラスメントの問題でも、1万人の女性を調査したデータがありますけれど、東京で8割方の女性がセクシュアル・ハラスメントを体験しているという回答がでています。アメリカでも、10年くらい前のデータだと、8割くらいの女性がセクシュアル・ハラスメント体験があると回答していました。アメリカでは、現在では大体2割から4割ぐらいの女性がセクシュアル・ハラスメントの経験があると回答するようになっている。日本は、今なおその2倍から4倍ぐらいの女性たちがセクシュアル・ハラスメントを体験している。しかし、男性たち、大企業の幹部は、うちにはいませんといっている。そういった社会に私たちは暮らしているわけです。

最近読んで大変面白いと思った本で『日本人のセクハラ』という、アメリカの方たちが書いた本があります。セクハラ問題だけではなくて、日本人のビジネスマンとどうやって付き合ったらよいか、書いてある本なのです。

この本の冒頭に、こんな例が書かれています。「おうむの時間と私たちが呼んでいるものがある。日本側の質問に対して、私たちのチームの女性が応えると、日本人は質問者も含めて、その答えを聞いていなければその女性を見もしない、という状況を表すものです。そこで、その女性の同僚である男性が、その女性のいった通りのことを応えると、今度は日本人全員の顔がぱっと明るくなってすぐに理解してくれるのです。このゲームは果てしなく続き、同僚の男性にとっては、私たちのいったことを繰り返さなければならないので、何とも不愉快な時間ではありますが、これには対抗手段があります。おうむの時間になったら、男性の同僚にこういってもらうのです。『キャロルはこの件についての権威です』『この件についての質問に答えられるのは彼女だけです』あるいは、『この問題については、私よりキャロルの方がよく知っています』と、これはなかなか効果がありますよ」

こんな風土の社会ですから、日本では、女性問題に男性たちは気がつかない。しかし、厳然として、女性差別がある。女性差別があるにも関わらず、それに気がつかれてはいない社会。そのために、そこでセクシュアル・ハラスメントが起きる。

6. 大学社会とジェンダー・バイアス

なかでも、大学という場所は、今日配布されているビラにも書いてありましたが、男性中心文化の温存されている社会である。企業社会と労働組合など、今でも結構、男性中心の社会があります。でも最近、ここ1年間の間に、企業でも、「女性問題についてちょっと講演してくれませ

んか」と、声が掛かるようになっていきます。企業社会や労働組合でもちょっと動き始めた。これに対して、大学という社会は、女性問題に関して、それこそ全学的な議論をするということは、ほとんどされてはいない。

それどころか、研究至上主義と業績主義だけが横行している。その一方で必ず犠牲があるわけです。犠牲者は妻であったり、あるいは、補助的な作業をする助手であったり、あるいは事務職員であったり、その他女性であることが多いわけです。研究至上主義、業績主義の背後に、多くの女性の、今補助的といいましたけれども、そういう作業が存在している。

うちの近所の人なのであまりいいたくないんですけども。このあいだ、某名誉教授が、妻と二人でいる姿を見ました。よく会うのですが、すごくびっくりしました。鼻が垂れてるんです。駅で座ってるんですが、ふかないんですよ。妻がふいてやっているんです。「だめねえ、あなた」って。自分で鼻もふけないんですよ。大学という社会のなかで培われた男性には、自分で鼻もふけない男性がいっぱいいるわけですね。セクシュアル・ハラスメントは、そういう社会のなかで起こっているわけです。

優越への強い指向性には、はやく有名大学に就職したいとか、はやく教授になりたいとか、そういう業績ゲームが当然あります。同時に、さきほどいった権力指向のなかで、女性と男性の対等な人間関係というものが成立していない。女性の補助的な役割の存在を前提にしてる社会ですから、成り立ちようもないといえますか、不十分な形でしか成立しない。

しかも、ジェンダー・バイアスというか、学問は男のものだという思いこみが、大学のなかではまだまだ強い。大学における女性教員数は、短大の場合は、大体38.5%くらい。1980年頃からあまり変わっていませんが、4年制大学の場合は9.6%、10年前は8.4%です。1.2%増えているわけですが、増えているといっても、やっぱり、助手または講師が多い。といっても、これからは変わっていかざる得ない。文部省もだんだんそういう方向へ転換を図っているようです。

しかし、ジェンダー・バイアスは、大学という社会においてはまだまだ大変根強く存在している。大学の仕組みそのものが、そういうもので成り立っている。あるいは大学の先生の生活そのものがそれで成り立っている、ということを考えておく必要があるのではないかと。

さらにいいますと、大学で今やっている学問、近代科学そのものが、近代的なジェンダー・バイアスというようなものに汚染されているそのことに大学で生活する人々もそろそろ気がついた方がいいんじゃないかと思います。近代科学は、男性の目で組立てられた科学です。最近ではフェミニストから、自然科学のなかに、ジェンダー・バイアス、男性の視点というものがどれぐらい根強くあるか、という議論も出始めています。その意味で、大学そのもの、つまり学問そのもののなかにあるジェンダー・バイアスを見つめる必要が今でてきているんじゃないかと思います。

セクシュアル・ハラスメントの解決に向けて、後で河村さんがおっしゃると思いますけれども、

学内的な枠組みを、どういうふうに早急につくっていけるか。セクシュアル・ハラスメントの相談窓口をどういうふうにつくっていけるか。そこでは、大学の点検、大学自身の抱え込んでいる様々のジェンダー・バイアスを、ひとつひとつ暴くなかで解決していくことが問われると思います。これはもう近代の学問そのものを根本的に批判することにもつながりかねない問題なのかもしれません。社会的な視点に立てば、生活スタイル全体を含む、男性中心の文化を捉え返すような時期にきていることも事実だと思います。そういう課題を考えながら、大学におけるセクシュアル・ハラスメントの問題を私も微力ながら考えていきたいと思っています。